＊湘南遺産プロジェクトHP＊

湘南の由来
ショートショート
第5話-2

“湘南”という地域呼称はどこから来たのか？ その疑問に迫るショートショートの第5話

えと文　和田精二　2021,11,20

5-2 県が主役の“湘南ブランド作戦”

『“湘南”地域を東京、横浜の郊外ととらえ、
“湘南”一帯に緑地を残しながら都市を分散し田園都市を展開させる。』

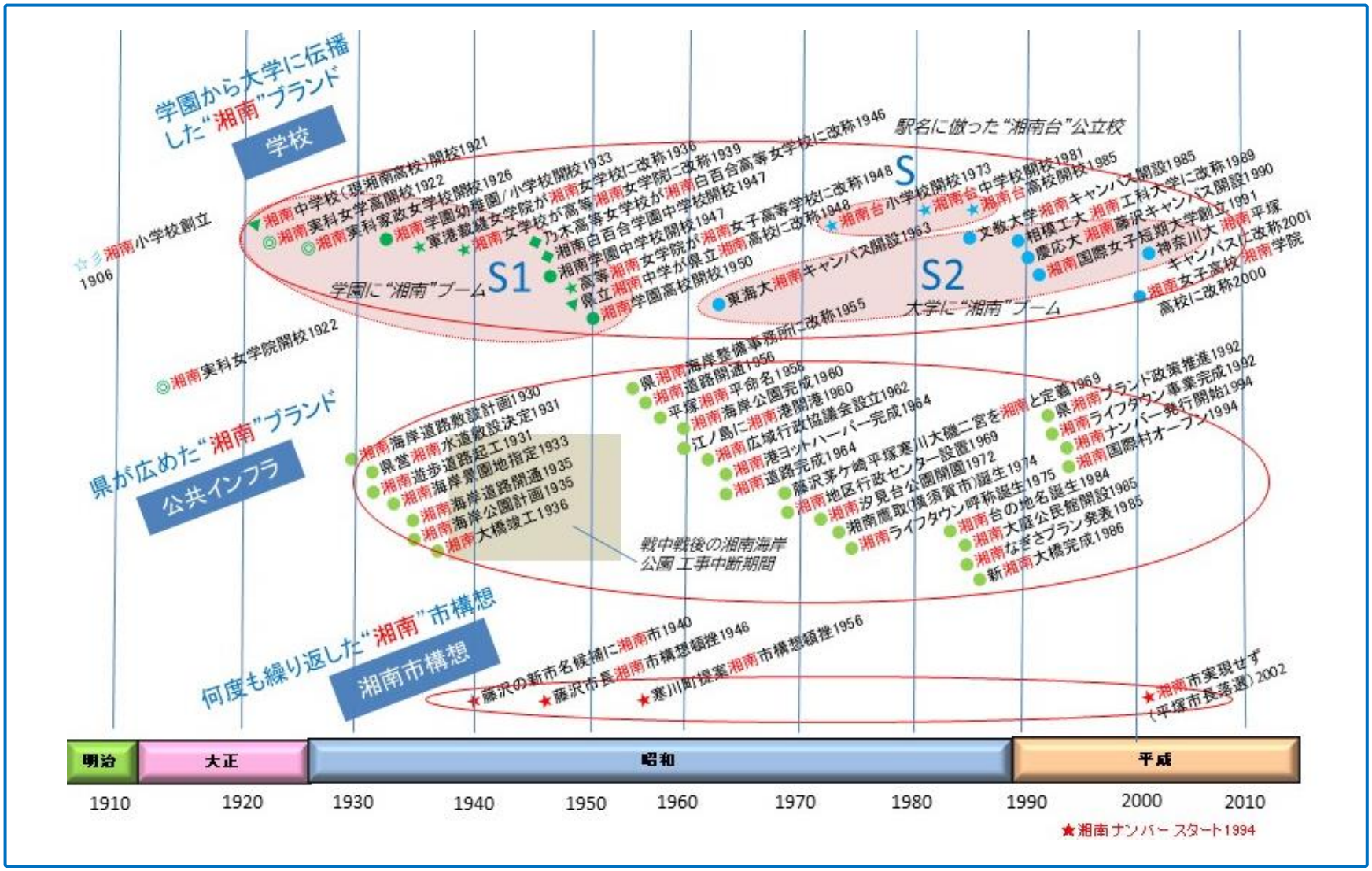
神奈川県知事 山県治郎は 確固たる信念で “湘南”の都市計画を推進、
海岸沿いの公共インフラの呼称に“湘南”を冠していく。

“湘南”の範囲はさておいて
“湘南”呼称が公のお墨付きを得て 大手を振って歩くことになる。

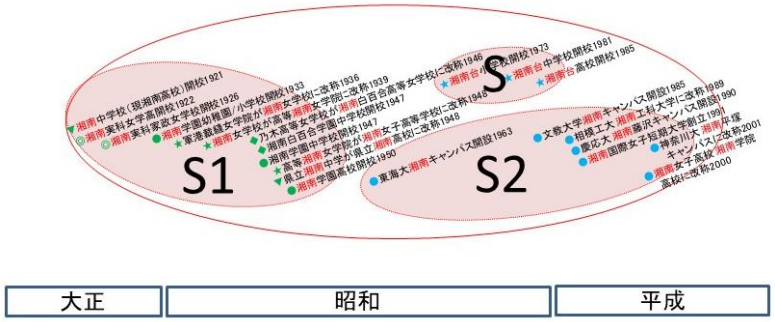
昭和28年まで“湘南遊歩道”と呼ばれていた国道134号線。
写真は片瀬海岸沿いの風景

前回の【年表A】では 明治に急激に増えた“湘南”の
冠呼称についてその意味するところを考えてみた。

今回は 昭和初期から平成まで長期間にわたって
現れた“湘南”呼称を集めて【年表B】とし、そこに
現れた“学校”と“公共インフラ” について考える。



【年表 B】: 昭和以降、長い期間にわたって現れた“湘南” 呼称



“学校”名として誕生した“湘南”呼称は以下のように分類出来る。

S1；私学の学園名として誕生した第1期
S2;大学のキャンパス名として誕生した第2期
S3；藤沢中西部に公立校名として誕生した例外期

注：S3の“湘南台”は“湘南”と同レベルの地域呼称として扱う。

こちらは藤沢実科女学校の入学記念写真（大正14年）

S1，私学の学園名として誕生した第1期

大正半ばに誕生した県立“湘南中学”（現”湘南高校”）は例外として、昭和に入ると“湘南”を冠した私学が誕生する。

大正11年(1922)、藤沢駅の南側に開校した県初の職業学校の“湘南実科女学校”が経営陣の内紛で閉校すると、

後を継ぐかたちで大正15年(1926)に“湘南実科家政女学校”が開校、昭和18年(1943)まで存続する。

校門に“文部大臣認可高等湘南女学校”とある

一方、“湘南”呼称が鉄道会社名（“湘南電鉄”）や駅名（“湘南田浦”等）に現れた横須賀では、

その影響を受けて、昭和11年(1936)、横須賀の軍港裁縫女学院が“湘南女学校” に改称する。
同校はその後も改称を重ね 現在の“湘南学院”に至る。

続いて 鵠沼や片瀬にも同様の動きが現れる。

205

“湘南白百合学園”正門（昭和26年）。
創立の地、片瀬海岸にあった頃の正門と校舎の様子

教育学者小原國芳が創立した玉川学園の分園として 昭和8年(1933)、鵠沼に“湘南学園 幼稚園・小学校”が開校。鵠沼の別荘地に住む財界人の子弟が通う学園としてスタート。その後、現在の幼・少・中高一貫校の総合学園に至る。

海軍軍人で敬虔なカトリック信者だった山本信次郎の後援で創設された片瀬乃木幼稚園を前身とする片瀬乃木高等女学校が昭和21年(1946)、“湘南白百合高等女学校”に改称、その後、現在の“湘南白百合学園高等学校”に至る。

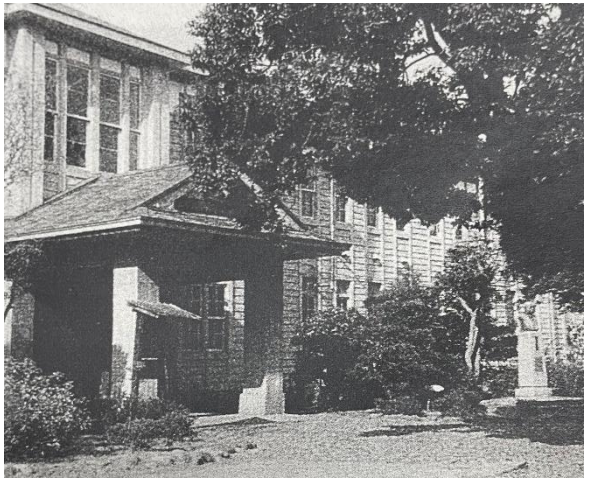
206

吉井勇が鎌倉で詠んだとされる歌

私学が学校名に“湘南”を謳った時代、
そこには徳富蘆花や吉井勇が表した“瀟湘湖南”に
象徴される中国湖南省の山水画的な“湘南” の
イメージが漂っていた。

こうした昔日の中国イメージに依拠した“湘南”
呼称を学園名に取り入れた動きは湘南エリアの
大衆化と共に徐々に沈静化していく。

207



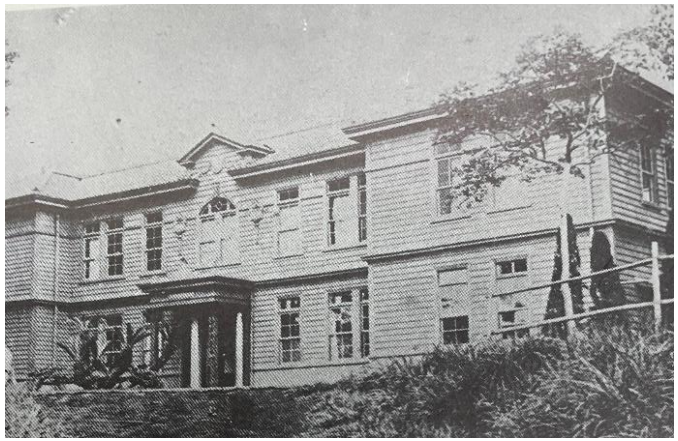
“湘南中学”は昭和22年の学制改革で“湘南高校”
となる。写真は昭和32年の同校の正門

冒頭で触れた“湘南中学校”は “湘南”を全国に知らしめたという
意味で、徳富蘆花に次いで “湘南史”に刻まれる。

その史実をふりかえって見る。

“湘南中学校”は、藤沢町の地元有志者が20年にわたり県会
へ請願を続けることで、大正10年(1921)ようやく県内で6番目
に開校した旧制中学校である。

208



大正4年に開校した私立藤沢中学（現藤嶺学園藤沢高校）、昭和13年の写真。

開校も遅かったが開校決定後もひともんちゃくあった。

校名が“ちと大きすぎる”と県知事からクレームが入るが、代案の藤沢中学校は同名校が既に存在していることが分かり申請通り“湘南中学校”に落ち着く。

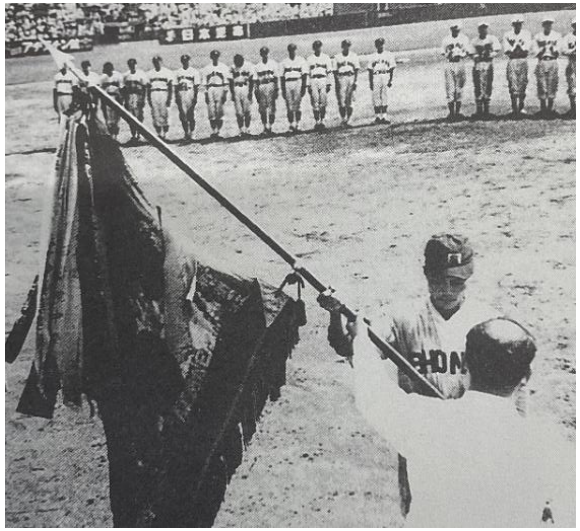
その私立藤沢中学校（現在の藤嶺学園藤沢高校）の生徒たちが、競争校が来ると経営的に自滅すると危機感を募らせ生徒大会開催後に町内を示威行進、趣意書を配布したことが記録に残っている。

優勝直後の“湘南ナイン”（手前）と肩を落としてベンチに引き上げる三岐代表岐阜高ナイン

無事開校した“湘南中学校”のスポーツ面での活躍は目覚ましく、昭和21年（1946）、国体のサッカーで全国優勝を果たす。

その後も勢いは止まらず、昭和24年（1949）、バックネットも無かった創部3年の野球部が夏の甲子園で優勝を飾る。

松本（信越）、高松（北四国）、岐阜（三岐）等との接戦を征し、大正5年の慶応普通部優勝以来33年ぶりに優勝旗の箱根越えを果たす。



相手校の地元の岐阜駅前には凱旋門が建てられ部員の凱旋を待っていたという

市内の街頭ラジオに市民が群がり実況中継に一喜一憂するが、甲子園には準決勝まで10人余、決勝戦でも50人程度の応援団のみ。

祝賀の花火とどろく中、藤沢に帰って来たナインは、万余の市民の出迎えを受け、同校ブラスバンドを先頭に母校に戻る。

沿道では数万の市民が興奮のるつぼと化し、夜は夜でちょうちん行列が繰り出し、祝賀ムードが2週間以上続く。

お祭り騒ぎは周辺にも飛び火、鎌倉でもちょうちん行列が行われた。

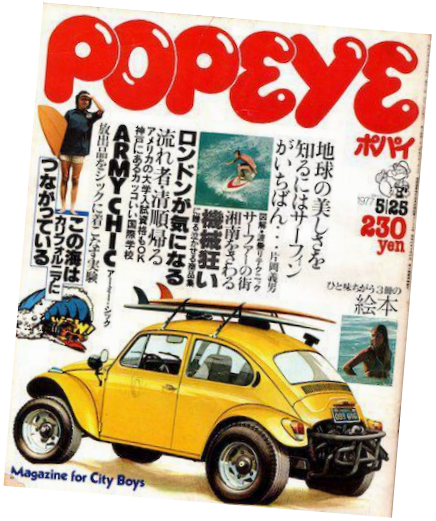
藤沢に戻り歓迎を受ける湘南中ナイン

部活動が始まった終戦直後は部活資金が枯渇したため、部員を始めとする学生の父兄などに借金や寄付金を懇願していた。

作家の久米正雄や林房雄が後援会に入り寄付もしたが、オペラ歌手の藤原義江は現金がないため、螺子（ねじ）会社食堂でプリマドンナの砂原美智子と音楽会を開催。結果的に藤沢市始まって以来の文化事業となる。

秋風や　最美の力　唯盡くす

この句は鎌倉に住んでいた高浜虚子から同校に送られた句である。



S2；大学のキャンパス名として誕生した第2期

太陽の季節、サザンオールスターズ、加山雄三等による“若者の湘南”ブームが作用して、昭和末期から平成にかけて 大学に“湘南”冠ブームが訪れる。

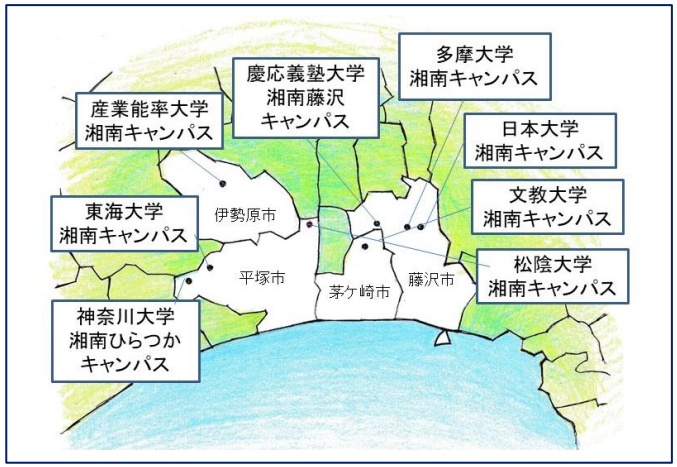
昭和52年5月25日号の“POPEYE”で初めて“湘南”が特集される

相模工業大学（手前）の後方左に“湘南海岸公園”、後方右に江ノ島を臨む（昭和38年）

とは言え、大学名を改称するにはリスクを伴うため、キャンパス名に“湘南”を冠することが流行る。

唯一大学名を改称したのは、米軍から返還された辻堂海岸の跡地に昭和38年(1963)開学した相模工業大学。
同学は平成2年(1990)、“湘南工科大学”に改称する。

新設大学が少ないため、学校名に“湘南”を冠する大学は、僅かに“湘南医療大学”と“湘南鎌倉医療大学”のみ。



“湘南キャンパス”の所在地

真っ先に“湘南キャンパス”を謳ったのが東海大学。
文教大学に22年先行し 昭和38年(1963)“湘南”を冠する。

その後の“湘南キャンパス”ブームが左図に窺える。

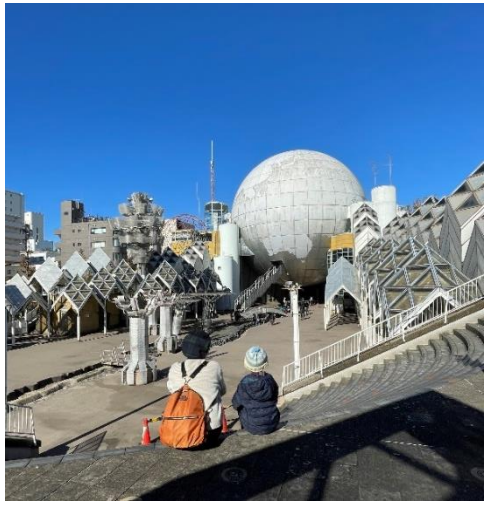
どのキャンパスも海から遠く離れた丘陵地にあり、明治以降に形成された“湘南は海の近く”というイメージから程遠い。

“湘南キャンパス”＝神奈川キャンパスと解釈した方がしっくり来そうであるが・・・・・

神奈川県のナンバープレートのエリアマップ

そうした解釈も、その後制定された“湘南ナンバー”のエリアマップを見ていると、各大学が謳う“湘南キャンパス”に妥当性を感じてしまう。

雅称として親しまれて来た“湘南”は対象エリアを拡大させながら、一方で“湘南”のイメージを曖昧にして来たようである。



平成2年(1990)に開館した“湘南台文化センター”は長谷川逸子の作品

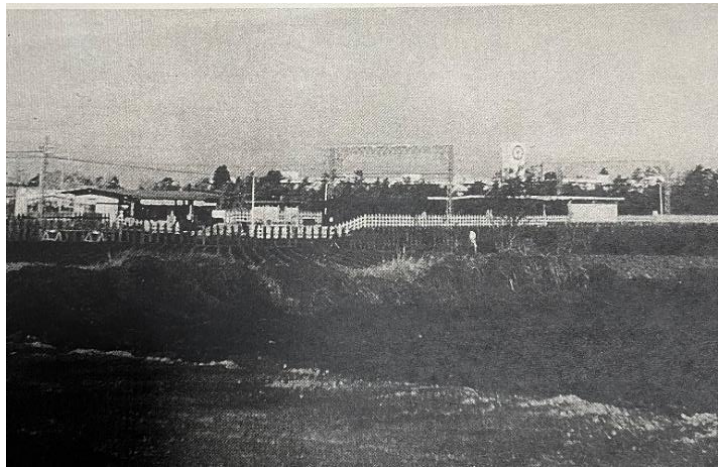
S3;藤沢中西部に公立校名として誕生した例外期

“湘南”地域を一望できる高台を“湘南台”という。

昭和48年(1973)、“湘南台”を冠する“湘南台小学校”が藤沢市の中西部に開校する。

8年後、“湘南台中学校”も開校するが、どちらも昭和39年度の藤沢都市計画書によって認可され設置された学校である。

(県立“湘南台高校”は昭和60年(1985)に開校する)

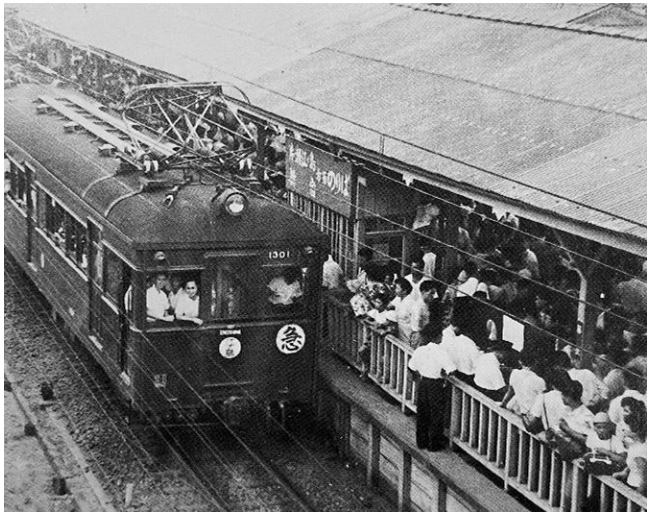


東側から見た湘南台駅(昭和41年)。当時、東口は無く、畑だけが広がっていたことが分かる。

ところが、両校が開校した時点で“湘南台”という地域呼称は該当エリアに存在していない。

存在していたのは、昭和41年(1966)に藤沢市の北部工業開発の拠点として誕生した小田急江ノ島線の新駅“湘南台”という駅名のみ。

この小田急江ノ島線が開業したのは新駅“湘南台”の開業から37年も遡る昭和4年(1929) である。



1 時間毎に新宿と江ノ島間を1時間25分で走る小田急線は、東海道線や横須賀線に対し、東京西部と“湘南海岸”を直結する新路線として 昭和4年(1929)にデビューする。

小田急江ノ島線が “湘南海岸”の夏の集客に大きく寄与したように“湘南台”駅も 駅周辺に大きな影響を及ぼす。

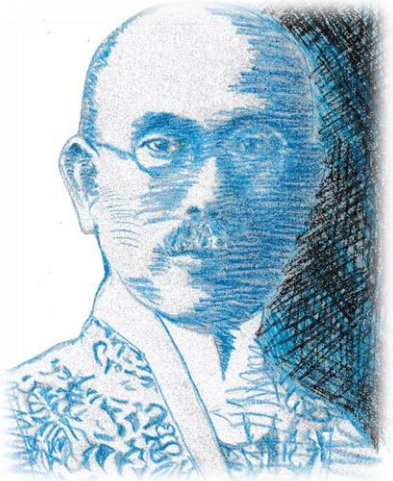
駅名が、小学校、中学校の校名に採用されただけでなく、昭和59年(1984)に“湘南台1丁目～7丁目”という住所を誕生させ、施設名や会社名等にも使用される。

小田急線藤沢駅に到着した超満員の急行列車。駅員が柵の外で客を誘導している

その後、同駅に相鉄いずみ野線、横浜市営地下鉄線が乗入れたことで、1日の乗降客数が小田急線全70駅の13位(2019)にまで浮上、存在感を示す。

この“湘南台”の西方に平成4年(1974)、“湘南ライフタウン”が誕生するが、この項目の“学校”と言う文脈から外れるため、【参考32】で解説する。

現在の“湘南台”駅。地下に小田急、相鉄、地下鉄の駅舎がある

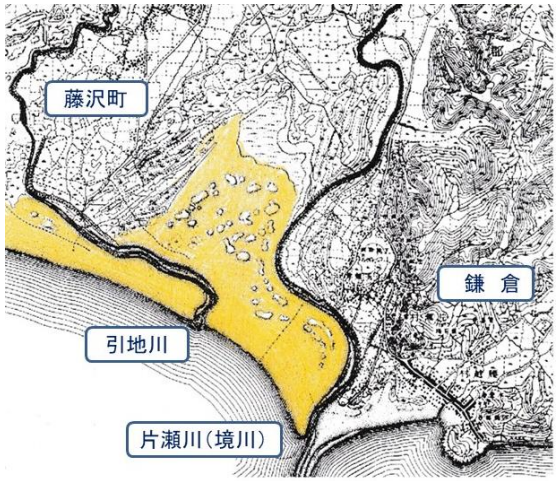


“湘南ブランド”作戦を牽引した
神奈川県知事山県治郎

【年表B】から見えて来る 県の“湘南ブランド作戦”

昭和に入ると、相模湾沿いに“湘南”を冠した道路、公園、橋、港などの公共インフラが目立つようになる。

そこには、神奈川県知事　山県治郎を旗頭に“湘南ブランド作戦”を展開する県の意思の営みが窺える。

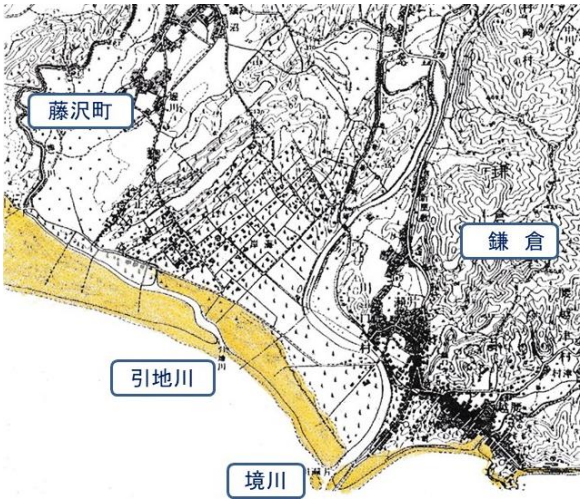


明治15年の境川・引地川周辺（砂州が陸地の奥まで食い込んでいる）

“湘南ブランド” 作戦が展開された経緯をまとめてみる。

昭和5年(1930)、山県は “湘南地方計画と風致開発策”と称する一文を“都市公論”7月号に発表する。

山県の主張とは、
(1)地方計画の主眼は都市分散、田園都市の効用の発揮にある。
“湘南”の風景開発はその観点に立つ。
(2)“湘南”地域を東京、横浜の郊外ととらえ、“湘南”一帯に緑地を残しながら都市を分散し、田園都市を展開させる。



大正10年の境川・引地川周辺（明治15年と比べ砂州がかなり後退している）

以上の視点から山県は“湘南開発構想”を打ち出す。

未開の丘陵地（鎌倉/葉山/横須賀）や 砂丘地帯（藤沢/茅ケ崎/平塚/大磯）を開発し、都市の分散に役立てるとともに、田園都市の効用を発揮させると主張し、

“湘南開発構想” 実践のための3つの目標を打ち出す。

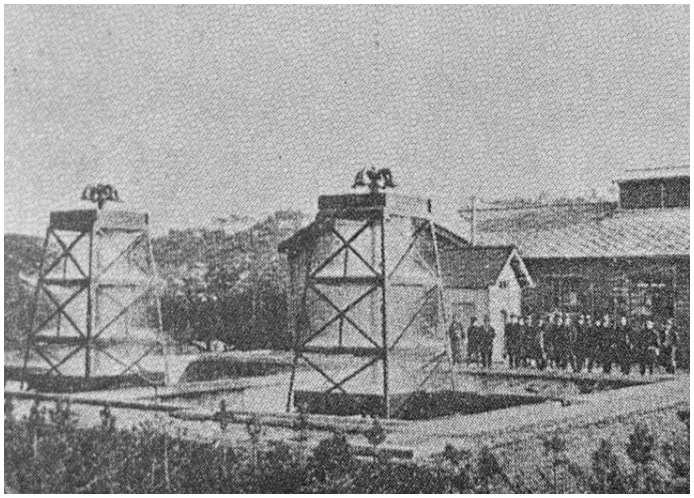
“湘南開発構想” 3つの目標

A：ライフラインとしての“県営湘南水道”の建設

B：“湘南”の交通事情を満たす“湘南遊歩道”の建設

C：“湘南海岸公園”を軸とした緑地網の整備

注目したいのは、A、B、C の全ての事業にしっかりと“湘南”呼称が冠されていること。



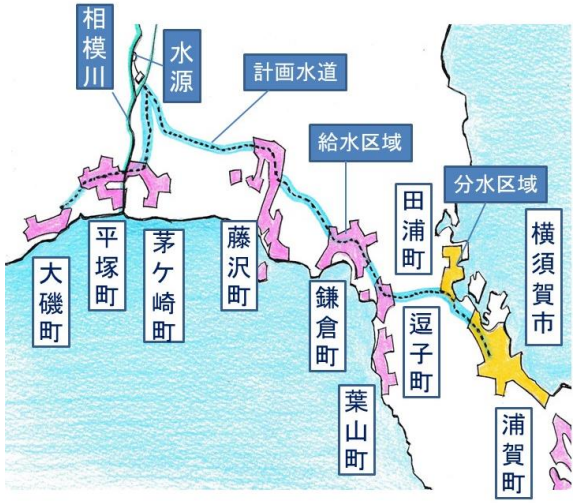
大正15年江ノ島水道が創立され、昭和3年玉川水道系と提携し
“湘南水道㈱”が設立される。鵠沼字石上に井戸を保有。

A: “県営湘南水道”の建設

県は大規模な県営水道を敷設し良好な住宅環境を整備しようとするが、多額の工費に加え地域民の支持と負担が必要となる。

この時、県の計画を支援したのが鵠沼の有識者を中心とした団体の“湘南親和会”。

同会は昭和6年(1931)、9市町による“県営水道期成同盟会”を発足させ、官民一致の運動を展開する。



“神奈川県営水道六十年史”掲載図に加筆着色

一方、鵠沼には 大正15年(1926)、高瀬弥一が起業した“湘南水道㈱”があり、既に藤沢、鵠沼、腰越等へ給水を行っていた。

“湘南水道㈱”は“県営湘南水道”計画に反発、鎌倉等への給水地域拡大計画を盾に激しく抵抗する。

その鎌倉では“湘南水道㈱”派と“県営湘南水道”派に分かれて議論白熱するが、石橋湛山ら“湘南倶楽部”の有力者の声が強く、“県営湘南水道”に軍配が上がる。

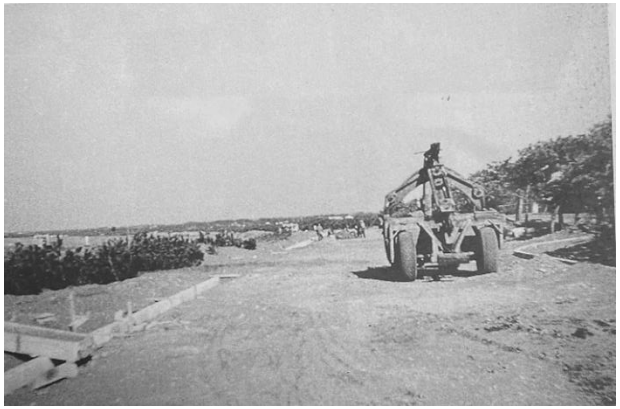
寒川にある旧送水ポンプ所は神奈川県水道記念館として保存され、“近代水道百選”、“土木学会選奨土木遺産”、“湘南遺産”に選定されている

昭和6年（1931）、通常県会で“県営湘南水道”計画が可決される。

水源を寒川付近の相模川の伏流水に求め、茅ヶ崎、藤沢、鎌倉、横須賀の東送水管と平塚、大磯の西送水管による11市町村対象の給水事業が動き出す。

昭和8年（1933）、県は“湘南水道㈱”を買収し、その年の内に起工、昭和11年（1936）に竣工する。

ここに、日本初の県営水道が完成する。



“湘南遊歩道”の改修工事風景（昭和30年）。“湘南遊歩道”は昭和28年に国道134号に指定される

B: “湘南遊歩道”の建設

山県は田園都市構想の主軸 “湘南遊歩道”の建設を推進する。

遊歩道には 外国人を含む東京、横浜からの客を箱根富士五湖方面に導入する“唯一無二の理想的遊覧道路”の狙いもある。

片瀬の龍口寺前から大磯町郵便局までの16.7kmにおよぶ“湘南遊歩道”は、

車道の両側に歩道と植樹帯、海岸側に幅7.5mの乗馬道を設ける日本初の本格的な逍遥道として建設される。

湘南遊歩道を走る加山雄三

県土木部に配置された多くの若手課員は内務省職員兼務のため、国家官僚意識も手伝い、全国的都市計画事業担当の気概で挑む。そのためもあり、都市計画史上、注目される事業となる。

財政難や海軍用地等の問題があったが、“湘南開発期成同盟会”の支援もあり、昭和10年(1935)、“湘南遊歩道”が完成。

昭和5年(1930)にスタートした“湘南開発構想”は都市計画法も追い風となり、昭和11年(1936)までに“県営湘南水道”と“湘南遊歩道”を完成させる。

229

昭和初期の鵠沼の別荘地。鵠沼は明治中期に大給近道子爵により日本初の別荘地として分譲される

“湘南遊歩道”の開設により東海道線各駅と遊歩道を結ぶ海岸地帯の県道が徐々に増え始める。

“県営湘南水道”の敷設とあいまって、海岸地帯における住宅地化が一層進展、昭和10年代に“湘南”は別荘地から住宅地への転換を早める。

現在の“湘南”が持つリゾート住宅地的イメージの原型は、こうした段階を経て形成されていくことになる。

230

開館当時の江ノ島水族館（昭和29年）。昭和27年、ドライブ中に片瀬で休憩した日活堀久作社長が発想し2年後に開館。近代建築学会賞を受賞

C: “湘南海岸公園”の整備

昭和11年(1936)、4年後のオリンピックの東京開催が決定すると、海岸地帯で外国人客相手のホテルの建設ラッシュが始まる。

選手村の招致や“湘南遊歩道”の舗装、県営プールの建設なども計画され、海岸地帯は開発に沸く。

ところが、昭和15年(1940)にオリンピックが中止され、政情が不安定化した後、太平洋戦争に突入、工事は中断される。

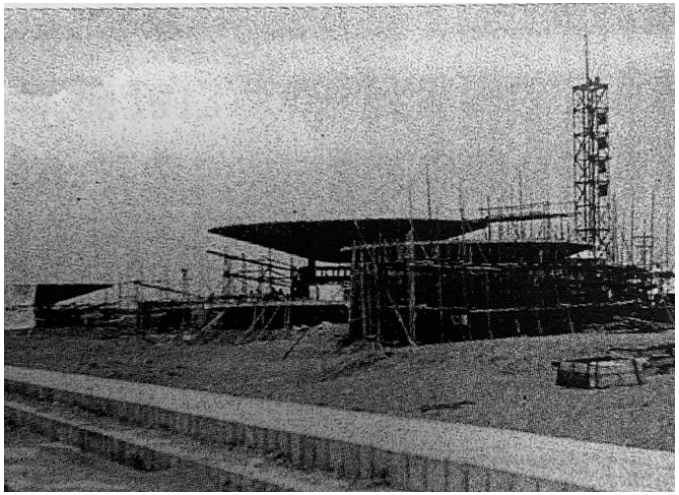
江ノ電江ノ島オートパーク	1951
江ノ電第2オートパーク	1956
小田急ビーチハウス	1956
小田急シーサイドパレス	1958
東急江の島レストハウス	1956
江ノ島マリンランド	1957
えのしまへるすせんたー	1957

“湘南海岸公園”の事業施設と開設時期

戦後における海岸地帯の整備は、昭和29年(1954)に開始される。

昭和30年、県が“総合開発計画”を発表するが、戦前の4市町を貫く“湘南海岸公園”計画は大幅に縮小され、ほぼ藤沢市内の事業に限定される。

“湘南海岸公園”は単なる観光施設ではなく、都市整備政策の一環と位置づけられると共に、建設に民間施設を活用する方式が導入される。



工事中の“湘南海岸公園”内の施設（昭和31年）

昭和31年(1956)以降、東急レストハウス、小田急ビーチハウス、江ノ島水族館マリンランド、小田急シーサイドパレスなどが次々と建設される。

昭和35年(1960)の太陽の広場の竣工により“湘南海岸公園”が“湘南遊歩道”に沿う形で完成する。

233

鉄パイプとサランに統一された波打ち際のモダンな“海の家”は風通しが悪く、
鉄パイプが強風で曲がり錆が出るため、従来の丸太とヨシズが見直される。

山県は“湘南海岸公園”と“湘南遊歩道”を一体として見た時の“海岸線の美的秩序”に執着する。

公園内建築物の高さ規制（max 8m)や海の家のモデルハウスの展示を行い規格と材料の統一を呼びかける。

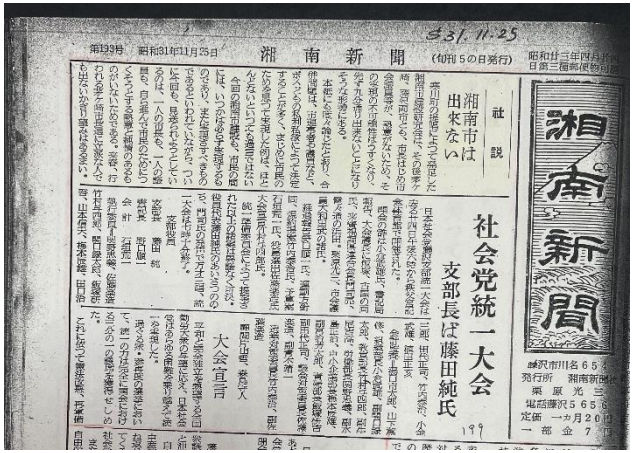
こうした努力が実ったせいか、海岸一帯が“東洋のマイアミビーチ”と呼ばれるようになる。

234

昭和38年(1963)、江ノ島に開設された“湘南港”

公共インフラ建設過程で出て来た会社名や団体名(“湘南親和会”,“湘南水道㈱”,“湘南倶楽部”,“湘南開発期成同盟会”)に“湘南”呼称が多いのに驚かされる。

県が“湘南ブランド作戦”を始めた昭和5年(1930)には、既に“湘南”呼称が好んで使用されていたことが上記事例からも理解できる。



第139号　昭和31年11月25日　湘南新聞　(旬刊5の日発行)　昭和廿三年四月廿日第三種郵便物認可

湘南新聞

社説

湘南市は出来ない

社会党統一大会

支部長は藤田純氏

大会宣言

大正から昭和に至る時代に 藤沢地区で“湘南”呼称が広く使用されていた事例の発見は難しくない。

地域紙ひとつとっても“湘南新報”、“湘南時報”、“湘南新聞”が発行され、“湘南”呼称の人気のほどが窺える。

“湘南”が藤沢、茅ヶ崎、鎌倉あたりを指して使用されるようになったのは日露戦争(明治37-38年、1904-05)の後辺りからという説(小風、藤沢市史研究37)に接すると納得がいく。

社説で“湘南市は出来ない”と報じる“湘南新聞”

“かながわシープロジェクト”は“湘南”を湯河原から三浦までと定義づけている

ここまで“湘南”という表現を使って来たが、“湘南”の範囲の定義づけは長い間なされていない。

神奈川県の公式発表は、平成26年(2014)の“かながわシープロジェクト”における“湘南の定義”が最初と思われる。

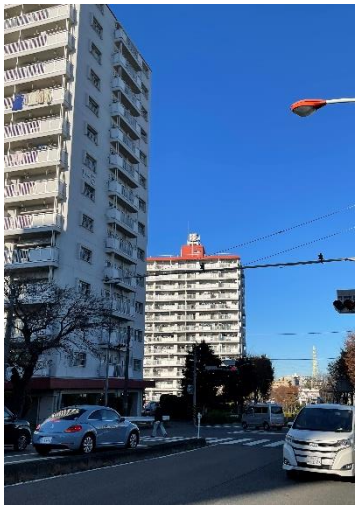
ただし、県の定義に対する市民の受容度は分かっていない。

【参考32】“湘南ライフタウン”誕生の経緯

横須賀市に“湘南鷹取”(No.107)が誕生した翌年(昭和50年(1975))、藤沢市の中西部に“湘南ライフタウン”が誕生する。

西武不動産が分譲した“湘南鷹取”と比べ“湘南ライフタウン”は公共事業であり事業規模も比較にならないが、参考のため、誕生までの経緯を取り上げておきたい。

“湘南ライフタウン”の地区名は“湘南大庭”、住所表示は“大庭”



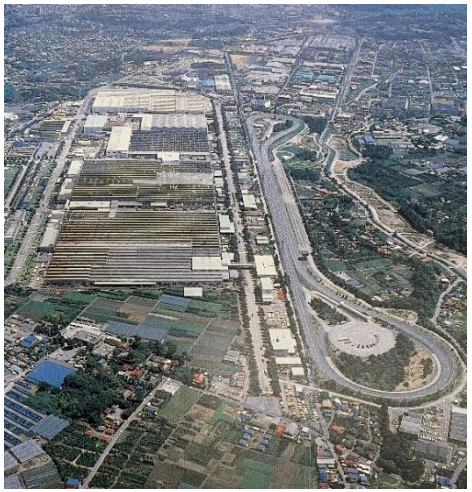
“湘南ライフタウン”中央けやき通り

●最初は“生産都市”を目指した藤沢市

昭和32年(1957)、藤沢市は“消費都市から生産都市”を目指す“総合都市計画”を策定する。

財政規模5億円の市が総事業費43.5億円を組み、都市計画家として名高い“菅原文哉“を都市建築課長にスカウト、同時に好待遇で優秀な人材を全国から集める。昭和35年には都市計画に携わる職員が88名を数えている。

その結果、神戸製鋼、松下電器の進出に続き、いすゞ自動車、荏原製作所も工場立地を希望、予測を超える展開に なる。



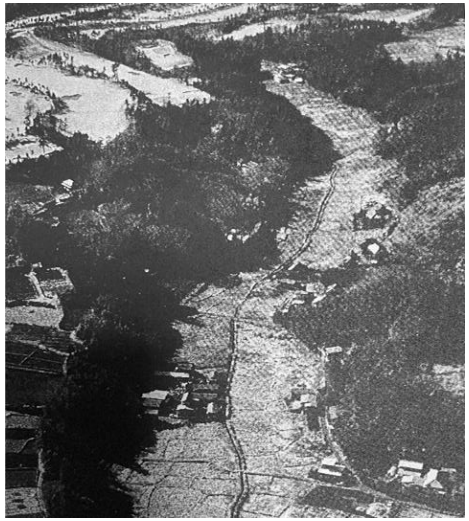
昭和36年に進出したいすゞの主力工場
右側が自動車のテストコース

●人口の急増で“総合都市計画”見直し

昭和35年以降、大手企業の誘致による市北西部の工業開発計画が成功を収めるが、実現に伴う人口の急増が問題となる。

加えて、昭和40年からの日本住宅公団(藤沢・辻堂・遠藤)等の大規模団地の建設や民間の住宅地開発による人口の急増も問題となる。

昭和35年から5年間の人口増加率が 40.6% に達し、昭和40年には人口が17万人を超え、新たな都市計画の必要性が叫ばれる。



開発前の大庭の航空写真。下の写真（黒川事務所制作のモデル）と同一地形と推定できる。

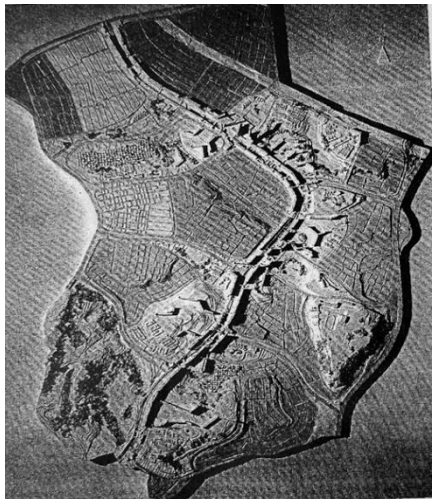
●“首都圏の生産都市”から“ベッドタウン“へ大転換

市は行政機構の大改革を行い、同時に“企画管理室”を新設する。

同室は、それまでの“首都圏の衛星都市”構想を止め、“首都圏のベッドタウン“構想を打ち出す。

喫緊の課題は、都市計画未整備区域のスプロール化（虫食い開発）と判断、地域開発を先行させる戦略を立て、

その対象地域を、スプロール化の危険性の高い、市の中西部の“遠藤・大庭・石川地区”に設定する。



黒川事務所制作の“湘南ライフタウン”模型

● “都市と農業が調和した立体的街づくり”構想を立案

緑地空間の確保と住宅需要の確保と言う相反する課題へ対応するため、中高層住宅街区へ85%、低層住宅街区へ15%の人口を配分し、

開発用地の先行取得と土地区画整理事業の併用開発を民間開発業者と官民共同で推進する計画を立てる。

基本コンセプトの“都市と農業の共存”を具現化するため、計画設計を“黒川紀章建築都市設計事務所”に依頼する。

メタボリズム建築を提唱した黒川紀章の作品のひとつ“中銀カプセルタワービル”

●黒川紀章にニュータウンの計画設計を託す

黒川案には、南北に貫く幹線上に設けられた中心ゾーンに公共施設や高層建築を集約する一方、開発地内の農家をそのまま残す、等の“都市と農業の共存”コンセプトが盛り込まれる。

これを受けて、市は“西部開発基本計画”を策定、翌年の昭和44年(1969)、市議会で計画を可決し、翌年事業をスタートさせる。
(“湘南ライフタウン”に含まれる茅ヶ崎市堤地区は茅ヶ崎市からの委託を受ける形で推進することになる)

事業は、低層2,100戸、中高層9,400戸、保全農家3,500戸、総戸数15,000戸、計52,500人の住宅地を昭和51年(1976)までに306.9億円の事業費で行う大規模開発となる。

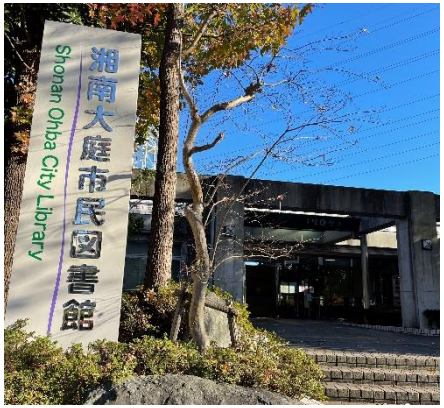
昭和62年(1987)“かながわのまちなみ100選”に選定される

●革新市長の誕生で計画が抑制される

昭和46年(1971)にスタートした事業は、地価の急騰で事業費が倍増し、収容人口も41,000人から52,500人へ増やさざるを得ず、市民からの批判が強まる。

昭和47年(1972)、葉山峻革新市長の誕生で 人口計画、住民負担や施設の見直しが行われる。

高層住宅の一部低層化、収容人口の抑制(45,000人へ減少)などが実施されたが、基本設計の変更は回避され、平成4年(1992)、ビッグプロジェクトが完了する。

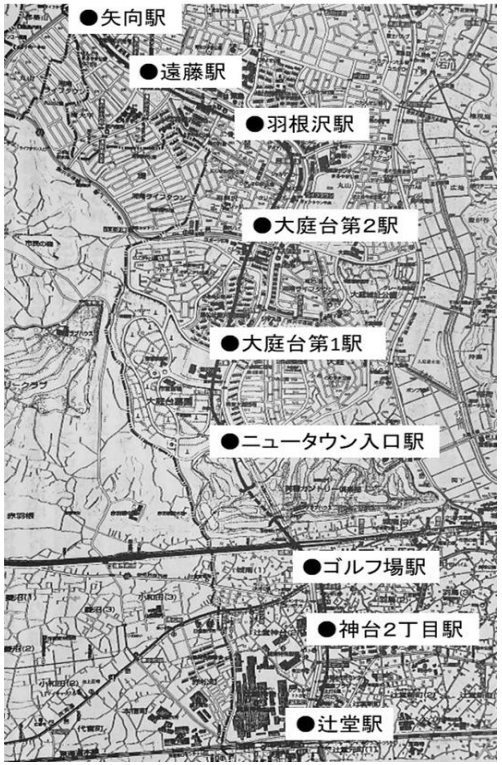


“湘南大庭”が冠された図書館

●“湘南ライフタウン”呼称の誕生

“藤沢ニュータウン”、“西部ニュータウン”と呼ばれて来た呼称が、昭和50年(1975) に統一され、“湘南ライフタウン” 呼称が誕生する。

“大庭”の地区名が“湘南大庭”に変更されたため、公民館、市民センター、図書館、消防署などに“湘南大庭”が冠され、“湘南”呼称 が市の中西部に展開される。



幻に終わった“藤沢モノレール”の予定路線図

【参考33】“湘南ライフタウン”縦断“藤沢モノレール”計画

藤沢市は関わっていないが、“湘南ライフタウン”の交通問題を解決する手段として、JR辻堂駅から遠藤地区まで、ニュータウンを縦断するモノレール計画が存在していた。

JR辻堂駅を出発後、終点矢向駅に至る全9駅を表定速度時速30km、全所要時間10分で走る予定だった。

この計画は“湘南モノレール㈱”と日本モノレール開発㈱によって作成され、事業主体は第3セクターを想定していた。
形式は“湘南モノレール”と同じサフェージュ式の懸垂型。

朝夕のラッシュ時以外の利用客が見込めないことから採算面で折り合いがつかず、中止になったものと推定される。

【引用文献・資料】

202:図;湘南遺産アーカイブ1“湘南年表”編,和田,2021,08,20 改定
204:図:保存版ふるさと藤沢,神津良子,郷土出版社,2010
文;鵠沼を巡る千一話,第0256話,幻の実科女学校
https://kurobe56.net/ks/ks0256.htm
205;図:ふるさと横須賀(下),石井昭,かなしん出版,1987
文:ふるさと横須賀(下),石井昭,かなしん出版,1987
206:図:保存版ふるさと藤沢,神津良子,郷土出版社,2010
文:https://ja.Wikipedia.org/wiki/湘南白百合学園中学・高等学校
https://www.shogak.ac.jp/histry
208;図:保存版ふるさと藤沢,神津良子,郷土出版社,2010
209;図:写真集明治大正昭和 藤沢,服部清道,国書刊行会,1979
文:回想の湘南昭和史50選,藤沢市史編さん委員会,藤沢市文書館,2009
文:藤沢市史第6巻通史編,藤沢市史編さん委員会,藤沢市長葉山峻,1977
210;図:湘南高校野球部甲子園史,湘南高校野球部OB会,朝日新聞出版局出版サービス、2001
文:湘南高校野球部甲子園史,湘南高校野球部OB会,朝日新聞出版局出版サービス、2001
文:回想の湘南 昭和史50選,藤沢市史編さん委員会,藤沢市文書館2009
211;図;湘南高校野球部甲子園史,湘南高校野球部OB会,朝日新聞出版局出版サービス、2001
文:ニュースは語る二十世紀の藤沢,藤沢市史編さん委員会,藤沢市長,2005
212;図:ニュースは語る二十世紀の藤沢,藤沢市史編さん委員会,藤沢市長,2005
文:湘南高校野球部甲子園史,湘南高校野球部OB会,朝日新聞出版局出版サービス、2001
213;図:湘南の誕生,湘南の誕生研究会,藤沢市教育委員会生涯学習課博物館準備担当
214;図:保存版ふるさと藤沢,神津良子,郷土出版社,2010
217:図:保存版ふるさと藤沢,神津良子,郷土出版社,2010
218;図:写真アルバ ム藤沢市の昭和, 佐々木高史, いき出版,2016
219;図:江の島から湘南へ,藤沢市教育委員会生涯学習課博物館準備担当,2003
220;文:https://plaza.Rakuten.co.jp/chattrois/diary/202006250000/
222;図:湘南の誕生,湘南の誕生研究会,藤沢市教育委員会,2005
の図に筆者が一部着色
文:湘南地域の住宅地化と海水浴場,八田恵子,藤沢市史研究第38号,藤沢市文書館,2005
223;図:湘南の誕生,湘南の誕生研究会,藤沢市教育委員会,2005
の図に筆者が一部着色
文:湘南地域の住宅地化と海水浴場,八田恵子,藤沢市史研究第38号,藤沢市文書館,2005
224;文:湘南海岸の変遷,大矢悠三子,藤沢市史研究48号,(続)藤沢市史編さん委員会,藤沢市文書館,2015
225;図;写真集明治大正昭和 藤沢,服部清道,国書刊行会,1979
文:市民が歩んだ80年,(続)藤沢市史編さん委員会,藤沢市2021
226;図:市民が歩んだ80年,(続)藤沢市史編さん委員会,藤沢市2021に掲載された図に加筆着色
文:市民が歩んだ80年,(続)藤沢市史編さん委員会,藤沢市2021
228;図:保存版ふるさと藤沢,神津良子,郷土出版社,2010
文:湘南の誕生,湘南の誕生研究会,藤沢市教育委員会,2005
文:図説ふじさわの歴史,写真集図説集刊行会,藤沢市文書館,1991
229;図:企画展江の島から湘南へ,藤沢市近現代資料調査会,藤沢市教育委員会生涯学習課,2003
文:藤沢市ブックレット1回想の湘南 昭和史50選, ,(続)藤沢市史編さん委員会,藤沢市文書館,2009
文:湘南の誕生,湘南の誕生研究会,藤沢市教育委員会,2005

230;図:保存版ふるさと藤沢,神津良子,郷土出版社,2010
文:湘南の誕生/行楽地湘南の確立,本宮一男,湘南の誕生委員会, 藤沢市教育委員会,2005
231;図:保存版ふるさと藤沢,神津良子,郷土出版社,2010
文;図説ふじさわの歴史,写真集図説集刊行会,藤沢市文書館,1991
232;図:小田急ビーチハウスの表をどうするか
文;湘南海岸の変遷,大矢悠三子,藤沢市史研究48号,(続)藤沢市史編さん委員会,藤沢市文書館,2015
233;図:市民が選んだ80年-藤沢らしさを求めて-, (続)藤沢市史編さん委員会編,藤沢市,2021
234;図:保存版ふるさと藤沢,神津良子,郷土出版社,2010
文:神奈川土木行政のあゆみ,神奈川県土木部,(財)神奈川県都市整備技術センター,1993
235;図:https:ja.wikipedia./wiki/湘南港
236;図:湘南新聞 自173号-至257号(藤沢市総合市民図書館蔵)
文:湘南の誕生,小風秀雅,藤沢市史研究,(続)藤沢市史編さん委員会編,藤沢市,2004
文:藤沢の新聞事情,近藤拓,わが住む里66号,藤沢市総合市民図書館,2017
237;図:https://feelshonan.jp/others/about/images/shonan_map_big.png
239:文:(続)藤沢市史別編4,市民が歩んだ80年,藤沢市史編さん委員会,藤沢市,2021
240:図:図説ふじさわの歴史,写真集図説集刊行会,藤沢市文書館,1991
文:湘南讃歌,吉田克彦,江ノ電沿線新聞社,2006
241;図:保存版ふるさと藤沢,神津良子,郷土出版社,2010
文:市民が選んだ80年-藤沢らしさを求めて-, (続)藤沢市史編さん委員会編,藤沢市,2021
242;図:市民が歩んだ80年-藤沢らしさを求めて-, (続)藤沢市史編さん委員会編,藤沢市,2021
文:藤沢市史ブックレットⅠ,回想の湘南昭和史50選, (続)藤沢市史編さん委員会編,藤沢市文書館,2009
243;図:https://upload.Wikipedia.org/Wikipedia/commons/2/26/Nakagin.jpg
文:市民が歩んだ80年-藤沢らしさを求めて-, (続)藤沢市史編さん委員会編,藤沢市,2021
244;文:市民が歩んだ80年-藤沢らしさを求めて-, (続)藤沢市史編さん委員会編,藤沢市,2021
246;図:湘南讃歌,吉田克彦,江ノ電沿線新聞社,2006

❖第5話-2 完了
2021.11.20